会報

167号

新日本美術協会

事務局
横浜市港南区港南台
1-39-5
鈴木忠義方
TEL045-832-0504

編集委員
石原　修
篠　光定
早田美智子
小高峯夫

原稿常時募集
次号令和元年11月予定

令和元年度 総会開催される

事務局長　鈴木　忠義

令和初の新日本美術協会定期総会が六月三十日(日)上野・日展新会館において会員三〇名が出席して開催された。総会は委任状八八名を含め過半数の一一八名となり成立した。

「令和元年度定期総会議案書」に基づき、司会に石村委員、議長に石原委員、書記に湯澤委員、議事録署名人に早田、住佐両委員を指名して議事に移った。

第一号議案「平成三十年度事業報告」を鈴木事務局長が、「収支決算報告並びに財産目録」を小宮山会計委員が説明、松本監査委員が監査結果報告を行なった。第二号議案「令和元年度事業計画案」を鈴木事務局長が、「収支予算書」を小宮山会計委員が説明。第三号議案「会則第九条の一部改正(案)」を鈴木事務局長が説明。それぞれの議案書説明後、質疑応答、採決により賛成多数で議案書通り承認された。

新委員紹介

埼玉東支部
新支部長
辺見　昭彦

総会で埼玉東支部長と委員を拝命の辺見昭彦です。

代表、事務局長、各委員のご活躍は新日美展や会報等で承知し、敬意と感謝あるのみです。

定年を機に始めた油彩・水彩、いつの間にか一六年が経過。最低でも空は五年、水は一〇年と教えられ風景の奥の深さを実感しています。

6年前、癌で胃を全摘、三途の川は渋滞で渡れず帰されました。開き直って個展(駄作一〇〇点)を開催したり、五〇年続けた下手なゴルフも再開し、毎朝晩芝犬と老々散歩を楽しんでいます。

新日美での任務は時代に即した運営、魅力ある展示会となるよう努力する所存です。

委員コラム

巨匠の言葉　ジャクソン・ポロック
「私の絵画の源泉は無意識である」　大石　亨

ジャクソン・ポロックはニューヨークでいま一番の売れっ子作家の一人である。

ニューヨークはいまパリーに代わって世界一の画壇にまで成長した。それには第二次大戦中の多くの前衛画家の亡命、絵画市場の拡大など原因はいろいろあるが、ポロックら若い抽象画家の出現によるところが大きい。

ポロックはいわゆる「ボーリング(注ぎ)手法」「ドリッピング(滴り)手法」を駆使して描いた。従来の筆触を重ねて描く手法からすれば、きわめて奇抜な多分に偶然的な方法である。人々はその新鮮さに驚き、目を見はった。

ポロックは言う。

「私はカンヴァスを床に敷いて描く。このやり方だと私はカンヴァスの周りを歩き回ることができ、四方から仕事ができる・・・」

「私はイーゼルやパレット、絵筆などはほとんど使わない。私が好むのはスティックやコテ、ナイフなどである・・・」

「私は絵の中にいるとき、自分が何をしているか気付かない。気付くのは一仕事終わった後である」

「私の絵の源泉は無意識である。内的な情緒の核心に無意識を介して迫ろうとする。いうなれば私にとって絵画は自己表現である・・・」

一九五六年八月二日午后一〇時、ジャクソン・ポロックは飲酒運転とスピードの出し過ぎで路傍の木立に激突、四四歳七カ月余の生涯を閉じた。

当時、ポロックは絵が思うように売れず、その上、妻リーとの仲がうまくいかず、苦悶していた。事故は妻リーが欧州に旅立った留守中のことだった。

事故死の後、ポロックは抽象表現主義の代表的画家として、高く評価されるに至った。

インディアンレッドの地の壁画(部分)